



郡中、新居浜、東京

川田 篤
弁護士・弁理士



母は、祖父祖母から、ふるさと郡中は良い所と聞かされています。しかし、満州から引き揚げて初めて目にした郡中は、満州で住んでいた百万都市の新京（現在の長春）やハルビンと比べ、寂しい町に映ったようです。現在の郡中の商店街は店屋さん个点在している感はありませんが、当時も大都市に匹敵する商店街を求めようとすれば無理があったかもしれませ

ん。
母が郡中に引き揚げたころ、祖父は、当初、愛媛県庁に職を得ました。しかし、そのうち、新憲法下、簡易裁判所が新たに置かれ、祖父は、簡易判事になりました。最初の任地は新居浜簡易裁判所でしたので、母は新居浜西高校に進学しました。当時から新居浜には、住友系の社員が多く住み、都会的な雰囲気があったようです。
進駐軍の占領下の日本では、「鬼畜米英」から一転、自由と民主の豊かな国アメリカが、ハリウッド映画と共に、新居浜を含め日本の隅々にまで紹介されたようです。私の両親は、いわゆる昭和ヒトケタですが、この世代ほど、教育が一夜にして変わった世代はほかにないでしょう。母は料理をしながら

ら歌うのが好きでしたが、軍歌を歌っていたり、アメリカの映画音楽を歌っていたりと、矛盾が奇妙に同居していました。
母は、祖母が和裁をしていた影響を受けたのか、高校在学時、デザイナーになりたいと思っていたようです。当時、デザイナーを目指す若者は、東京の文化カドレメが定番でした。文化とは文化服装学院、ドレメとはドレスメーカー学園のことです。
しかし、母は、結局、東京の女子短大の家政学部の被服科に進学しました。新居浜西高校は高等女学校に起源があり、その女子大のOGの先生がおられ、強くその女子短大への進学を勧めたようです。ただ、女子短大に進学を決めた瞬間、デザイナーの道は、事実

ふるさと伝言

上、閉ざされたように思えなくもありません。良妻賢母を育てるための学校と、デザイナーとは両立しないでしょうから。
母は、父と結婚した後も、家事、育児の傍ら会員制の編み物教室に通ったり、ろっけつ染めをしたりしていました。ろっけつ染めは、京都に伝わる染色法で、布にロウを塗り、ロウが塗られていない部分を染める手法です。しかし、そのうち、展覧会好きの母は、今度日本画を習い始め、ニカワを溶かし、岩彩を和紙に塗り始めました。どれも主婦の手習い。結局、モノにはなりませんでした。
母は、晩年に至るまで、パリコレのような世界にそこを持っていたようです。しかし、それは単なるあこがれで終わりました。

もっとも、母がデザイナーの学校ではなく良妻賢母の学校に進学したからこそ、自分も生まれたのかもしれません。
本年は、戦後生まれの世代が古希を迎えようとしている年でもあり、ここまで聞きかじりの昔話をしてきました。多くの犠牲を払いながらの敗戦に、それまで両親が吹き込まれた「神州不滅」のような価値観は否定され、新しい価値観を求めて再出発した感があります。最近ますます個人が自分探しに右往左往している感もあります。夢を追つか、地道に生きるか。少子高齢化、人口減少など社会が衰退する中、若い方は難しい選択を迫られているように思います。
(かわた・あつし、本籍伊予市)